

2022年  
1月7日  
金曜日

●退任教授最終チャペル講話／井口 泰 教授（労働経済学）

# コロナ危機の中で、私たちは時代を変えることができているのか

うチャペルを担当することを申し出て、認めていただきました。

近年、経済学部でも、学生のみならずが原典をよむ機会が減り、教科書しか読まない傾向が強まっています。私は、経済学部生の皆さんが自分で原典を読み、発見ができることを知っていただきたいからです。これは、聖書を自ら読んで発見するというプロテスタントの伝統に通じます。

こうして2019年度を通し、金曜日には、学部本館のチャペルにおいて、学生の皆さんと一緒に、讃美歌を歌い、聖書を一緒に読むことができました。しかし、2020年度と2021年度は、新型コロナウイルスの蔓延からオンラインに切り替えました。ただし、出来る限り、リアルタイムとオンデマンドの両方で実施しました。

チャペルにおいては、聖書の講読だけでなく、讃美歌とともに歌うことは重要でした。それは、時代を越えて、人類が直面する危機と不安の時代を生き抜いてきた人々から学ぶことに他ならないからです。このため、チャペルで、必ず、讃美歌の作曲者や作詞者の人生、讃美歌の歌詞に込められた思いを語りました。そして、聖書の言葉を、不透明な現代世界と危機の中で理解するように努めました。

1月7日の最終チャペルの讃美歌として、「あかつきの美しい星よ（讃美歌21・70番）」を歌いました。この星は、北半球の1・2月頃、太陽が上る前の東の空に輝く金星です。都市化が進んだ現代において、人類は、自分と自然や天体とのつながりが意識できなくなり、経済活動が地球上の「被造物」を、急速に破壊し

ている現実も、抽象的にしか理解されていません。また、私は、「あかつきの星」が、イエス様の象徴とされてきた背景も語りたかったです。

最終チャペルで、選んだ聖書の箇所は、「今、泣いている人は幸いです」「今、飢えている人は幸いです」という、イエス様の語られる逆説です。現在、私たちは出口の見えない「パンデミック」の中にいるからこそ、皆さんも、この逆説を、理解できるようにするのはないかと考えたのです。すなわち、コロナによる危機が襲ってこなかったら、私たちはいつまでも、自分の健康や力のみより頼み、弱い人々の世界に対し、何の関心も抱かなかつたかもしれないのです。ところが、今や、新型コロナウイルスによる危機で、健康な人と病気の人の区別は、ますます曖昧になっています。聖書を

讃美歌21・70番 ドイツの讃美歌集・EG276「あかつきの空の美しい星よ、まことの光。エッサイの切り株の新しい枝よ、ダビデの子イエス。主よ、主よ、とうとい恵みの光よ、わが王、わが主よ。」

聖書 ルカによる福音書 第6章 20節「イエスは目を上げて弟子を見つめながら、話し始められた。「貧しい人たちは幸いです。神の国はあなた方のものだからです。今飢えている人たちは幸いです。あなた方は満ち足りるようになるからです。今泣いている人たちは幸いです。あなた方は笑うようになるからです。」

2019年4月から、経済学部宗教主事の舟木謙先生が院長に就任され、宣教師として李相勲先生が来てくださいました。こうしたなか、私もチャペルの一翼を担いたいと思い、金曜日に「経済学と聖書」とい

つぶさに読むと、戦争、災害、飢饉、疫病は、連鎖して人類に降りかかってきます。

皆さんは、日本を含めた先進国の経済には、飢饉など起こり得ないと思つていませんか。確かに、「飢饉の経済学」が当てはまるのは、例えば現在のアフガニスタンなどの農業国だけのように見えます。工業化が進んだ国では、国内農業がほとんど衰退しているのに、食糧危機は起こりません。これは、これらの国が、工業製品輸出による貿易黒字で外貨を獲得し、食料を北米や豪州などの国から輸入するため、一見、飢饉のリスクから解放されたように見えるだけなのです。現実には、コロナによる経済危機下で、世界中で「サブライチエイン」の棄損と再編成が起きています。私たちが、これまで、当たり前のように調達してきた物資やエネルギー、食糧が、調達できない危機が起こりつつあることを忘れてはならないのです。

聖書は、地球環境や生物を破壊し、弱者を放置する人間の活動は、世界に飢餓や疫病という結果を広げることが示唆しているのです。宗教改革者マルティン・ルターは、自らペストに苦しむ時代を生き抜いた人ですが、疫病は神様の人類への罰だ

と思つていたほどです。

私は現代人が、もつと聖書から学ぶべきだと思います。聖書は時代を越えて、人類の活動と試練を教える書物なのです。それなのに、どうして皆さんは、深く知ろうとしないのでしょうか。

第1に、聖書の言葉が、使い古され、決まり文句になり、深い意味を問おうとしなくなったのか、あるいは、難しい教義になったのではないかと思います。例えば「罪」や「恵み」を日々実感できない現代人が、聖書に関心を持つてでしょうか。私は、世界に広がる分断や断絶こそ、目に見える罪であり、繋がりがや共感を「恵み」と感じます。それは人間同士の間だけでなく、人間と自然の間でもそうです。

第2に、人間中心に聖書を理解する傾向が強まり、聖書が現実から遊離したように解釈されているからです。例えば、モーセの「十戒」を、現代人は、自分とは関係のないもののように考えています。「殺してはいけない」という意味でしか理解しません。私たちは、日々、隣人を、精神的に苦しめていることに、気づかないのです。隣人に対し無関心で、その人を窮地に追い込んだり、必要な支援

をせずに、無視しています。「自己責任」という言葉も、無関心という罪の温床になる恐れがあります。

第3に、私たちは、人類が生物や自然環境に対し抱えてきた敵意にも気づかなくなっています。使徒パウロは、ローマ人への手紙第8章19節で、「被造物は、切実な思いで、神の子どもたちが現れるのを待ち望んでいます」と書いています。古いギリシャ語の「被造物」には2つあり、生物の意味だけでなく「地球環境」の意味でも用いられています。人類と被造物の間の敵対関係を認識し、これを和解に導く生き方や経済社会の方向を求めることについて、キリスト教会は、あまりにも熱心ではありませんでした。

第4に、弱いところには、神様が働くことの重要性を忘れているのです。使徒パウロ自身、一生、てんかんといい病に苦しんでいたのです。彼は、「私の力は、弱いところに完全に現れる」(コリントⅡ12・9)と書いています。ここでいう弱いところというのは、社会でハンディキャップを追った、女性や障害を負った人々など、人に理解されない少数者も同様です。聖書は貧しいことや悲しいことが良いなどと言ってはいません。しかし弱い人々こそ、

格差と断絶に苦しむ世界を認識し、新たな世界へのビジョンを持ち、時代を変える力になるのではありませんか。これに対し、格差が自分に都合のいい人たちは、現状を肯定し利用するだけです。加えて、貧しい又は悲しいとは、物質的な意味に留まらないと思います。多くの人々の精神が弱り、社会に正義が欠けているからです。(マタイ4・21-10)

学生の皆さんが聖書から学ぶことは、たくさんあります。表面的な言葉や説明で、皆さんは安易に納得してはなりません。なぜなら、聖書が語るように「真理は深い」(コリントⅡ12・10)からです。

最後に、金曜日のチャペルを毎週助けて下さった学部職員の方々に、厚く御礼申し上げます。